

# ルゴン＝マッカール叢書における女子教育の 人格形成への影響について

森田 陽子

## はじめに

女子教育というテーマは、19世紀後半のフランスにおいて非常に注目されていたテーマの一つである。法律面から言えば、この時期もっとも注目すべきものは、1880年のカミーユ・セー法の成立であろう。女子中等教育を確立したこの法律は、フランス女子教育の歴史においてきわめて重要な一步と言えるが、その後まもなく女子師範学校の創立も定められる。このような制度の変革に加えて、1860年代から1870年代頃には、修道院付属寄宿学校という教育形態の是非、とりわけ女子教育における非宗教性の確立をめぐっての論争も盛り上がりを見せていた。こうした時代にあって、流行に敏感で時代の流れをつかむのに長けたゾラは、もちろん教育についてもいくつかの記事を残した。そもそもゾラは社会問題を論じるときに、問題の原因として教育を引き合いにだすことも多く、このテーマに関しては並々ならぬ関心を抱いていたことがうかがえる。「人はどのように結婚するか」という記事で、当時の結婚と夫婦関係の破綻を分析するとき、ゾラが原因として挙げるのは、男女の教育の違いが作り出す溝である。

この原因は、教育と知育が子どもの頃からわが国の男の子と女の子の間に掘る溝である。 [...] 6~7歳までは、遊ぶとき男女は一緒にされている。 [...]しかし、7歳で、社会が彼らを引き離し、奪い去ってしまう。 [...] 男女は互いにまったくの他人となるので、男女の出会いは当然ひどく気まずい。 [...] いつたい何を話せというのだろうか？ 男女は違う言葉を話し、もはや似たもの同士ではなくなっているのだ<sup>1</sup>。

このように、ゾラが教育を論じるとき、ほとんど常に言及するのは、男女別学の弊害である。男女が違う教育を受け、言葉の通じないまったくの他人と

<sup>1</sup> Émile Zola, *Oeuvres Complètes*, publiées sous la direction de Henri Mitterand, Nouveau Monde éditions (以下、OC nouveauと略し、巻数を記す), t. 12, pp. 715-716.

なってしまうために夫婦関係もうまくいかないというわけだ。そもそも同性だけを集めて教育することに対してゾラはつねに批判的な姿勢をとる。なかでも特に問題視していたのは、女子寄宿学校である。

### 女子寄宿学校で育つ娘たち

寄宿舎という世間から隔絶された空間で女子だけを集めて教育を受けさせるというシステムは、多くの19世紀の作家たちの目には重大な欠陥を秘めていると映ったようで、女子寄宿学校の悪影響はゾラ以外の作家も指摘している。たとえばゾラが敬愛してやまなかつたバルザックは、『結婚の生理学』の中で寄宿学校について次のように述べている。

もしあながたが、寄宿学校で教育された娘と結婚するならば、あなたがたの幸福をそこねる機会が、すでに列挙したものに加えて30は増えるし、あなたはまさにスズメバチの巣に手を突っ込んだ男に似ている<sup>2</sup>。

寄宿学校で育った娘について論じたこの短い章においてバルザックは、幸福な結婚生活の妨げになる寄宿学校教育の弊害を挙げてみせているのだが、ここでは次の2点に注目したい。まずは同性だけで共同生活をすることの弊害。そして想像力のままに夢想を膨らませることの危険である。

同性だけで生活すると、女同士の内密な打ち明け話によって恋愛の駆け引きについても必要以上の知識を得てしまい、肉体的には処女であっても頭の中は純潔 chaste ではなくくなってしまうとバルザックは述べる。また、修道院という閉鎖された空間のなかで育つ少女たちは、励まなければいけない勉学や仕事もなく、思う存分想像力の中にあそぶことを許されているため、女友達から仕入れた知識のせいもあり、結婚生活の幸福について過度の期待を膨らませてしまうという。

修道院の鉄格子は想像力をかき立てる。 [...] 結婚生活の幸福を過大視したあげく、夫のものになったとき「なんということだろう！ これだけのものだなんて！…」と心に思う女性たちもいる<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> Honoré de Balzac, *Physiologie du mariage* in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. XI, 1980, p. 967.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 969.

バルザックのこの懸念は、たとえば『ボヴァリー夫人』のエマや『女の一生』のジャンヌの中に具体化されている。エマは修道院付属の寄宿学校で育った少女時代に読書によって恋や幸福について想像を膨らませため、結婚してからは現実の結婚生活や夫に幻滅したあげく、不倫に走る。一方、『女の一生』の場合、冒頭から読者は次のような一節に出くわす。

昨日、修道院付属寄宿学校を出たばかりのジャンヌは、やっとこれからは永久に自由の身になって、ずっと前から夢見ていた人生のあらゆる幸福を手に入れなのだとはりきっていた [...] <sup>4</sup>。

ジャンヌもエマ同様、修道院の中で恋愛や結婚生活について想像をめぐらせて、長い間期待を膨らませている。ジャンヌはやがてジュリアンという美青年と出会い、最初は理想的だ相手だと思って結婚するが、結婚してから目立ち始めた吝嗇や浮気性といった夫の欠点に何度も幻滅させられる。エマとは違い不倫には走らないものの、ジャンヌは夫との交流を拒み、失望と諦めの中で単調な日常生活を送ることを選ぶのである。

このように、2人とも、修道院で過ごした娘時代に、理想の結婚生活や、情熱のあり方、そしていつか出会い恋に落ちるべき「彼」の姿を想像力によって作り出している。もちろんそれらは頭の中で考え出された理想であるため、必ず現実との齟齬をきたす。現実の夫は「彼」とは似ても似つかなかつたり、最初は「彼」だと思ったが、実は違っていたと悟ることもある。その結果、夫のことを精神的、あるいは肉体的に拒むことになる。エマは、レオンという愛人と不倫の恋をするが、その恋にもやがて失望する。彼女はレオンに恋文を綴りながら、「青みがかった国」に住む「彼」の姿を思い描く。

「青みがかった」というのは、この小説においては一つのサインとなっている。エマは初めて愛人を持ったとき、「青みがかった」広大さ une immensité bleuâtre に包み込まれるような感覚を覚えることからも分かるように、この色はエマにとって現実とはかけ離れた夢の世界と、そこで交わされる情熱的で官能的な恋を象徴する色である。そして修道院の教会でマリア像を包んで煙る香は「青みがかった」色をしており、この夢想は修道院付属の寄宿学校という場がなくては生まれ得なかったものであることを示している。そして寄宿学校で彼女の想像力が生み出した、青みがかった異国の地に住む情熱的な「彼」を彼女は求め続ける。この「彼」の前にはどんな男も平凡で月並み

<sup>4</sup> Guy de Maupassant, *Une Vie* in *Romans*, édition établie par Louis Forestier, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987, p. 3.

なつまらない男へと成り下がる。夫はもちろんのこと、不倫の恋も、愛人も、それが現実である限り「彼」には敵わないのである。

俗世間から隔たった修道院という空間で作り出される夢と過度な「期待」は、こうして結婚生活という現実に直面した女性たちに「幻滅」を味わわせる。そのことが結婚生活を送る上での大きな障害になる、という点で3人の作家たちの見解は一致を見ているようである。

それでは、幸福な夫婦関係を築くにあたりこれほど問題視されていた寄宿学校について、ゾラは具体的にはどのように考えていたのだろうか。またその考えはどのようにゾラの小説に昇華されていったのか。以上のような点を出発点としながら、ゾラの手による幾編かの記事と小説を取り上げながら探ってみたい。

### ゾラの考える寄宿学校教育の弊害

#### 1. 女らしさと恥じらい

寄宿学校での教育についてゾラが非難するのは、まず少女たちの本来の姿をゆがめ、人工的で人形のような女に仕立て上げてしまうという点だ。「社交界の女たち」と題される記事の中で、ゾラは次のように述べている。

少女は、社交界向きに育てられ、お上品な偏見を吹き込まれ、流行の服をまとマネキンに変身させられてしまう。挨拶の仕方も、考え方もそのように作られる。お行儀を良くするための製法があり、同じように、あらゆる状況での振舞いを教える製法がある。これ以上に嘆かわしいことはない。女性の生まれもった優美さ、非常に魅力的な生き生きしたところ、個性を形成すべき要素はすべて細工され、歪曲され、同じ一つの型にはめられてしまう<sup>5</sup>。

良い結婚相手を見つけるために社交界でのマナーやきらびやかに装う術を学んだ少女たちが、もはや少女本来の魅力と個性を失い、誰もが同じ「製法」で作られた「社交界の女」の卵になってしまうことをゾラは嘆く。寄宿学校で育った少女たちは、このように社交界での振る舞い方だけでなく、自分でもほとんど知らないうちに、そして実際にまだ男を知らないうちから、男を誘惑する術までも身につけていく。『生きるよろこび』に登場するルイーズは、こうした寄宿学校出身の少女の特徴を体現している。妻に先立たれ、

<sup>5</sup> « Femmes du monde », OC nouveau, t. 10, 2004, p. 855.

すぐに再婚した父親は新しい家庭にかかりきりになり、ルイーズを寄宿学校に入れた。つまりルイーズはもっぱら寄宿学校で育ったと言ってもいい。その証拠に、この小説の主人公ポーリーヌと幼なじみのラザールの前に姿をあらわしたルイーズは、まだ11歳半ながら、「不均整な顔をしているが、とても魅力的で、美しい金髪を貴婦人みたいに結んで、ちらちらしている<sup>6</sup>」。この出会いから数年後、ふたたび2人に会いに来たルイーズは、ラザールを驚かせるまでに成長している。

とはいえ、彼女はもうひとりより美しくもなく、年上で、すでにくすんでいた。しかし、彼女には甘ったれた魅力があり、華奢で柔らかい四肢がしなだれかかると、あだっぽい全身が悦楽の約束と溶け合わさるのだった。彼は突然彼女を発見したかのようだった。かつてのやせっぽちの小娘の面影がなかったから。寄宿学校での長い年月が、処女でありながら頭の中は男のことばかりで、澄んだ瞳の奥に教育のいつわりを秘めたこの悩ましげな若い娘を生み出したなんてことがあるのだろうか<sup>7</sup>？

ゾラが繰り返し強調する「もうひとり」、つまりポーリーヌの健康的で自然な美しさは、ルイーズの駆け引きの巧みさと官能を刺激するヘリオトロープの香りには歯が立たない。寄宿学校での教育は、ルイーズをまるで別人のように豹変させてしまう。彼女は決して最初からラザールを誘惑しようと意図的に行動するわけではないのだが、結局ラザールはルイーズの女らしい魅力に惑わされ、婚約していたポーリーヌを裏切り、ルイーズと結婚するにいたる。ルイーズは無意識のうちに、寄宿学校教育の一番の目的である結婚相手の獲得を成し遂げる。

ルイーズのもう一つの特徴は、恥じらいだ。それは時に度を越えており、ゾラは「色っぽい女らしい病的な<sup>8</sup>」恥じらいと表現する。凄まじい苦痛を伴う初産の場面でさえ、この恥じらいは消えることがない。あまりの痛みに意識を半ば失うまで、ルイーズは自分の肌を人目にさらすまいと必死で抵抗を試みる。人目といつても、その場に立ち会っているのは女友達のポーリーヌだけだというのに、なぜこれほどの羞恥心を見せるのか。

ポーリーヌとルイーズを比較してみると答えが見えてくるように思える。

<sup>6</sup> *La Joie de vivre* in Émile Zola, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1960-1967, 5 tomes (以下、*Pl.*と略し、巻数を記す), t. III, p. 844-845.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 907.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 1080.

たとえばポーリーヌは、ポンヌヴィルの村人たち、特に子どもたちの生活と性の乱れを目の当たりにしても自然に受け止めるのに対し、ルイーズは顔を赤らめ、恥ずかしがる。

しかしルイーズは顔をそむけ、気まずい様子であったが、ポーリーヌは何の当惑もなく話を聞かせるのだった。ポーリーヌは、自由に育てられたので、人々の恥辱の前でも穏やかな勇気を見せ、純潔ゆえの率直さを持ってすべてを知り、すべてを話した。それとは逆にルイーズは、10年間の寄宿学校生活でいろいろ知っていたので、共同寝室で見た多くの夢で乱れた脳裏に話が呼び起こす数々のイメージに赤面した。そういうことは、たとえ考えても決して口に出してはいけないことだった<sup>9</sup>。

ここでルイーズの類を染めさせているのは、話が想起させるイメージの数々であり、寄宿学校生活によって蓄えられた知識と、たくましくなった彼女の想像力ゆえの恥じらいであるといえる。前に見たようにバルザックも寄宿学校で少女たちが性的な知識に通じやすいことを指摘しているが、ゾラはその知識ゆえに喚起されるイメージの豊かさの方に注意を向いている。つまり、出産の時にあれほど着衣の乱れを気にしたのも、素肌を見せることが恥ずかしいのではなく、そのむきだしの体が人にどのような性的イメージを思い起こさせるかを想像できるからこそその羞恥心だったわけである。ルイーズはこのように実際に見聞きすることから、実際以上の事態やイメージを思い描いたり、想像をめぐらせたりするため、極度の羞恥心を示す。それに加えて、寄宿学校で学ぶ社交上のルールが、ルイーズにこのような振る舞いをさせている。実際に知ってはいても、口には出さない、態度にも示さない、というのが淑女のたしなみである。このルールがあるゆえに彼女たちは、性的な話題については率直に話し合うことができないために、想像ばかりを膨らませることになる。

## 2. 偽善と慎ましさ

このように、何も知らないと装う術は寄宿学校教育によって少女たちが学ぶことの一つであることだとゾラは記事の中で語る。

寄宿学校ではたくさんの秘密を打ち明けられ、彼女は大人が小声でしか話さないようなことを学んだ。しかし、こうしたことはすべて注意深く隠しているし、好奇心やはやる気持ちを抑えることを知っている。毎日育ちの良い娘の偽善を

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 899.

教え込まれるのだ。育ちの良い娘は、何も知っていてはいけないし、慎ましやかでなくてはならないから、慎ましさと無知を装うのである<sup>10</sup>。

育ちの良い娘の偽善、それはゾラにとって第二帝政下でのブルジョワジーの偽善にも通じているといつてもいい。『ナナ』の中で、ゾラが何度も非難まじりに描写してみせたのは、白い手袋をしながら悪事を働く人々、つまりブルジョワジーの悪徳であった。この偽善を体現している富裕階級の一員に、寄宿学校出身のサビーヌ伯爵夫人がいる。修道院付属寄宿学校を出てすぐに17歳でミュファ伯爵と結婚したサビーヌは、夫と姑と一緒に、「修道院のようなメランコリー<sup>11</sup>」に包まれた家に閉じこもって暮らしている。ここで、ゾラは、学校を出た後も、修道院が彼女の生活と強く結びついていることを匂わせている。彼女には「敬虔な信者特有の冷たさ<sup>12</sup>」があり、小説の前半には、サビーヌの貞淑さを疑うものは夫のミュファを含めて一人もいない。しかし、この場面ですでに、実際にはサビーヌが貞淑な人妻ではないことが、いくつかのサインによって仄めかされている。新聞記者フォシュリーが偶然耳にしたサビーヌの愛人の噂、凍りついたように冷え切ったミュファ家にはそぐわない赤いサテンの椅子、そして、高級娼婦であるナナとよく似てぱってりとした唇などである。サビーヌを寄宿学校に入れた父親ド・シュワール侯爵は、場末の娼婦を相手に放蕩を繰り返しているのだが、官能を求める血はサビーヌにも確かに受け継がれている。ただ、先の引用で見たように、ゾラによると寄宿学校での教育により世間體を取り繕うことが上手になるため、周囲には気づかれないというだけである。ここではつまり、サビーヌの不倫ばかりでなく、彼女の貞淑ぶりがうわべだけのものであることも暗示されているのだ。

また、小説に登場して間もないこの段階でサビーヌの生活が修道院になぞらえられ、その彼女とナナとの類似が早くも明かされていることに注目したい。ヴェロニック・クノッカールが指摘しているように<sup>13</sup>、高級娼婦と寄宿学校での生活をゾラは確かに関連づけている。両者の共通点は、寝食の心配がなく、無為な生活を送っているから、というだけにはとどまらないように思える。この小説全体を眺めてみると、寄宿学校や寄宿生という言葉が高級

<sup>10</sup> « Types de femmes en France », *OC nouveau*, t. 8, p. 759.

<sup>11</sup> *Nana*, Pl., t. II, p.1144.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p.1148.

<sup>13</sup> Véronique Cnockaert, *Émile Zola. Les inachevés. Une poétique de l'adolescence*, Montréal : XYZ éditeur/Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes, 2003, p. 90.

娼婦たちに結び付けられていることが多い。ナナの娼婦仲間のシモーヌは寄宿学校出身だし<sup>14</sup>、ナナが年下の少年ジョルジュと、田園恋愛詩的なアバンチュールを楽しんだ時も、「まるでヴァカンス中の寄宿生のエスケープのように」<sup>15</sup>という比喩が用いられている。別の高級娼婦ガガにいたっては、良縁を得ようと娘を寄宿学校に入れたのに、母の望みとは反対に結局娘も母親と同じ高級娼婦の道を選んでしまう<sup>16</sup>。

最後の例を見ると、ゾラは寄宿学校での教育を、高級ではあっても娼婦の養成と変わらないものであると皮肉的にほのめかしているのではないかと思いたくなる。実際、サビースは、愛人たちと財産を食いつぶすようになり、挙句の果てにはデパートの売り場主任と駆け落ち騒動まで引き起こす。男の金を食いつぶし、感情のままに奔放な振舞いを繰り返すという行動は、ナナをそのまま思い起こさせる。言ってみればサビースは、高級娼婦のような人生を送るのである。

娼婦とも淑女ともつかぬサビースが浮かべる曖昧で謎めいた微笑は、繰り返し描写されることで彼女のトレードマークとなっているが<sup>17</sup>、この微笑があらわすけだるさはまた『獲物の分け前』のルネ・サッカールを特徴づける一番の要素である。

### 3.倦怠と世間知らず

ルゴン＝マッカール叢書第2巻となるこの小説のヒロイン、ルネは第二帝政下、「パリの夜空にあらわれた社交界の悦楽の風変わりな妖精<sup>18</sup>」である。彼女は、11年間の寄宿生活を終えた後、19歳でルゴン＝マッカール家の一員である野心家アリストイド・サッカールと結婚する。莫大な持参金と、70万 Franc 相当の土地付きでの結婚であり、また夫のサッカールも出世への階段を駆け上がっていくので、ルネは物質的には何不自由ない生活を送っている。しかし、この裕福さが彼女を耐えられないほどの倦怠感に沈ませ、ありがちな不倫では味わえないような新奇な刺激へと駆り立てる。安定した生活

<sup>14</sup> *Pl.*, t. II, p. 1176.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 1244.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 1397 参照。

<sup>17</sup> フィリップ・アモンは、ある特徴をその人物が登場するたびに繰り返すことで、その特徴がライトモチーフとなって、その人物の不变性を際立たせると指摘しているが、ここではサビースのあいまいな微笑は、アモンの指摘を例証している。(Philippe Hamon, *Le Personnel du roman. Le système des personnages dans les Rougon-Macquart d'Emile Zola*, Genève, Droz, 1983, p. 176.)

<sup>18</sup> *La Curée*, *Pl.*, t. I, p. 421.

に耐え難さを感じるルネには、最初の登場から不安定さを示すようなサインがいくつもあらわれている。

彼女は相変わらず目を細めていた。彼女の顔は生意気な少年のようで、整った額には深い皺が一本刻まれ、ふくれ面をした子どものように上唇が突き出した口をしていた。それから、よく見えないからと、彼女は鼻めがねを取った。男物の、べっ甲の飾りのついた鼻めがねである〔…〕<sup>19</sup>。

少年のような顔をして男物の鼻めがねを使っていることが示すように、ルネは、男と女、子どもと大人といった相反する要素を併せもった特異な存在感を持つ女性であり、その不均整はやがて訪れる生活の安定の崩壊を予告している。

また、ここで言及されているルネの近視も彼女の本性をさらけ出している。彼女にとっては、人生は、地に足を着けて歩む現実ではなく、ぼんやりとしたイメージで構成された光景に過ぎない。先に挙げた「社交界の女たち」の中でゾラは寄宿学校教育の内容の無益さを批判している。

わたしが思うに、わが国フランスの寄宿学校で、それもかなりよく管理された学校で若い娘が受ける教育は、きわめてお粗末で不完全なものである。〔…〕まず、少女たちは生活の現実的な知恵に関してはまったく無知の状態に置かれる〔…〕<sup>20</sup>。

寄宿生たちは、流麗な筆跡や、表面的な知識しか身につけず、現実生活においてはきわめて幼稚な認識しか持っていない。ルネにしても、現実把握能力はお粗末といつていい。そもそも莫大な持参金つきで結婚したのも、寄宿学校を出てすぐに、友人の父親である既婚者の男性によって妊娠させられたためであり、この件を承知の上でルネと結婚することへの口止め料を兼ねたお礼として彼女の叔母エリザベトがお金を出したのだった。彼女は服飾費を捻出するために嫁資を切り崩していく時にも、シャロンヌの土地だけは手離そうとはしないのだが、それも土地の価値を知ってのことではなく、ただ「優しいエリザベト叔母さまを悲しませたくない<sup>21</sup>」という理由である。

(サッカールの)妻は決してエリザベト叔母からもらった資産を譲り渡そうと

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 320.

<sup>20</sup> « Femmes du monde », *OC nouveau*, t. 10, p. 854.

<sup>21</sup> *Pl.*, t. I, p.437.

はしなかった。叔母さまに、もし自分が母親になつたら子どもに継がせるために手つかずにしておくと誓つたから、と言って<sup>22</sup>。

結婚前に妊娠した子は流産し、その後サッカールとの間に子どもを作る気はまったくないルネの場合、この場面での「子ども」という言葉には大した重みはない。しかも、この「誓い」も、金策が尽きる時までのものである。服飾費の支払いをするためにこの土地を売却することに同意した時も、夫サッカールの策略と土地の転売によって生じる莫大な利益には当然気づかない。ルネにとってこの土地は、サイン一つで洋服代に変身してくれる結婚祝いに過ぎない。ルネは、法外な金をかけてきらびやかに着飾ることに夢中で、夫のサッカールはルネの美貌を自らの出世に利用しているが、そのことにも彼女は気づいていない。このように、寄宿学校の教育は、ルネの中において、第二帝政下の名花の一人として数えるに足るだけの優雅な装いと、現実把握能力の著しい乏しさとして結晶していると言えるだろう。

こうして見てみると、ゾラの考える寄宿学校の教育は、先に見た作家たちのそれとは大分趣を異にしていることが分かる。たとえばルイーズは、少女たちが性的に早熟になり、実体験がないうちから恋愛の駆け引きに通じてしまう、という点でバルザックの主張を裏付けている。しかし、前に挙げた作家たちが強調する結婚生活への失望についてゾラが小説作品内で言及することがほとんどない。むしろ寄宿学校の教育によって作られた女性を描くときにゾラが好んで取り上げるのは、次のような点である。男を魅了する優雅な装い方、体面を取り繕うことだけに専心する偽善、満たされた生活に慣れきったための倦怠、現実感覚の欠如、そして肉体的、あるいは精神的な不安定さである。満たされることに飽きた彼女たちは、この充足感に耐え難さを感じており、その不均整な容貌や現実認識を欠いた行動の突飛さは、われわれにやがて来る嵐を予感させる。実際、たとえば欲望を刺激するきっかけ（ルネの場合、それは温室の熱帯植物が発する熱っぽく強烈な香りだが）が現れるや、彼女たちの行動は歯止めがきかなくなり、もはや体面だけ取り繕おうとしても隠せないような亀裂が生じてしまう（サビースの場合、不倫を重ねた末、デパートの売り場主任と駆け落ちして世間の評判になる）。また、ここで取り上げた3人の女性がいずれも神経質な気質を有していることにも注目したい<sup>23</sup>。ゾラによれば、寄宿舎という空間は、神経質な気質をさらに悪

<sup>22</sup> Ibid, p. 466.

<sup>23</sup> サビースは、「爪をひっこめて、神経質に脚をほんのわずかにふるわせるメス猫のようだ (Pl. t. II, p. 1163)」と表現されているし、ルイーズは「彼女は彼（ラザール）

化させてしまうらしい。『獵物の分け前』には、「もし家で育ったなら、宗教か何かで神経を満足させて、時折彼女をおかしくさせる欲望のうずきをごまかすこともできたろうに<sup>24</sup>」という一節がある。つまり、寄宿学校という空間で育ち教育を受けた彼女たちの神経は鎮まることがなかったというわけだが、それでは、家で育った女性たちの成長過程や教育の影響はどのようなものなのだとゾラは考えているのだろうか。

### 家庭での教育の弊害

家庭での教育についてのゾラの意見は、やはり何編かの記事に披瀝されている。この問題に関して特に参考になるのは、「ブルジョワジーにおける不倫」という記事だろう。記事の中でゾラは、家庭で育てられるブルジョワ階級の子女たちをいくつかのタイプに分けて論じている。そして、これらの女性たちは、記事が発表された翌年上梓されるルゴン＝マッカール叢書第10巻『ごった煮』にはほぼそのまま登場することになる。アンリ・ミットランの指摘を待つまでもなく<sup>25</sup>、小説と記事は密接に関わっており、ゾラの教育観を相互に補い合いながらわれわれに教えてくれる。ここでは、先の章と同じように記事と小説の両方を参照しながら考えていきたい。

#### 1.さらなる無知

寄宿学校での教育が、現実生活に対応していない無益なものであるとゾラが批判していることはすでに述べた。しかし、家で娘を育て、学校に通わせても、そこで学習する内容は、寄宿学校で学ぶことと本質的には同じである。

少女を8年から10年も手元に置きながら、何事もきっちりと教えることはなく、多くの少女たちがこれらの学校をほとんど無知のまま卒業する。きれいな字を書けるようになれば運の良い方である。 [...] このようにしてわが国の少女たちは教育を終え、両親の元に戻ってくる<sup>26</sup>。

つまり、学校での女子への教育も、寄宿学校でのそれと同じように、美しい筆跡や表面的な知識を教えることに終始しており、ろくなことは教えていないというわけである。また、貴族の家庭では、娘にさまざまな学科の家庭教

と同じくらい神経質だった (*Pl.*, t. III, p. 1054)』とされている。

<sup>24</sup> *Pl.*, t. I, p. 421.

<sup>25</sup> *Pl.*, t. III, p. 1608.

<sup>26</sup> « Types de femmes en France », *OC nouveau*, t. 8, p. 759.

師をつけて自宅学習をさせることもある。しかし、この形式においても、その内容はお粗末なものだとゾラは憤りを交えて語る。

しかしながら、この自宅学習というのもきわめて上っ面のもので、得られる成果は寄宿学校の教育とほとんど違いはない。いくらかの断片的な知識を持っていて無知とは呼べない女性は数えるほどしかいない<sup>27</sup>。

このように、ゾラによれば、寄宿学校に入れても、家で育てて学校に通わせたり家庭教師をつけても、フランスの良家の子女たちが学ぶのは、お稽古事程度の表層的な知識に過ぎない、というわけだ。しかし身につける知識のレベルに大した違いがないとはいっても、寄宿学校と家庭という教育の場の違いは、育てられる少女たちに大きな影響を与えるにはいられない。家庭での教育はいくつかの危険を含んでいる。家で娘を育てる際にゾラが懸念するのまずは、親が娘を囮い込み、世間から守りすぎることだ。

ドアというドア、窓という窓をふさぎ、外の空気が入らないようにする。娘を連れて外出する時、母親は恐ろしい目つきで見張る。父親は家の中で『ポールとヴィルジニー』は鍵をかけてしまいこみ、一枚の新聞も目につかないようにしておく。両親は娘に純粋でいてほしい。それが、彼らの目には無知と計り知れない愚かさを足したものに見えるのだ<sup>28</sup>。

「結婚するまで続く絶え間ない監視と厳しい監禁<sup>29</sup>」によって、一筋の風さえ入らない空間で、生臭い現実を伝える新聞や、両親からしてみると「不適当」な小説から遠ざけられて育つ娘は、まさに温室育ちで何も知らない。寄宿学校育ちの少女よりもさらに無知な女性となる。すでに見たように、寄宿学校育ちの場合、「生活の現実的な知恵に関するまつたく無知」であるが、「大人が小声でしか話さないようなことや秘密の数々」は知っている。純真な娘に見せるために何も知らないふりはしていても、性的なことに関しては実に早熟であるとゾラは考えていた。これに対して家で育てられた娘の中には、現実生活での知恵も、性に関してもまったくの無知のまま大人になってしまう娘がいる。「官能を目覚めさせる神秘的な修道院の空気<sup>30</sup>」の中では

<sup>27</sup> Ibid., p. 763.

<sup>28</sup> « L'Adulterie dans la bourgeoisie », OC nouveau, t. 11, p. 776.

<sup>29</sup> « Types de femmes en France », OC nouveau, t. 8, p. 759.

<sup>30</sup> « Au Couvent », OC nouveau, t. 3, p.427.『新ニノンへのコント』に収録されている『断食』(OC nouveau, t. 6, pp. 250-254)という短編でゾラは、教会に熱心に通う男爵夫人を描いている。彼女は、信仰心が篤いというよりは、薄暗い教会に立ちこめる香り

育っていないために、刺激を受けなかった官能は眠ったままである。このまったくの無知と無感覚は、『ごった煮』の登場人物の一人、マリ・ピションにあらわれている。マリの母親がオクターヴに語って聞かせるように、両親は彼女を過剰に保護し、檻の中に閉じ込めて育てた。

ドアというドア、窓という窓を閉め、舗道の下劣さを運ぶ風が流れ込んできたためしはありません。外では、あの子の手を決して離さず、不道徳な光景を見なくてすむように目を伏せて歩かせるようにしていました。 [...] そして、娘が大きくなってからは、無垢な女の子たちを堕落させる寄宿学校に通わせずに家庭教師を雇いました。授業にも同席して、余計なことを知らずにいるように監視し、もちろん新聞は隠し、図書室も閉めていました<sup>31</sup>。

家に閉じ込められて世間知らずに育てられたマリは、まさに何もできない。ただ飾られていることしかできない人形のような女性である。公務員と結婚し、リリットという子どもを産んでからも、それは変わらない。何しろ、夫に手伝ってもらわなければ子どもの服を着せることもできないのである。知識や現実生活での知恵がないというだけでなく、マリは道徳観念すら知らない。

純粋すぎる娘たちは、成長してからきわめて簡単にあやまちを犯す。あまりに愚かに育てられてしまつたために、貞潔であるとはどういうことかも分かっていないのだ<sup>32</sup>。

貞淑がどういうことなのかも分からないので、もちろん不貞がどのような効果をもたらすかなど想像できるわけもない。しかも、嫉妬、衝動、快楽といった激しい感情を一切持たないマリは、不倫への一步をあまりに簡単に、そしてほとんど何の感情も持たずに踏み出してしまう。『獲物の分け前』のルネが、義理の息子マクシムとの不倫に背徳的な快楽を味わうのとは違い、マリは不倫を楽しむことができない。なぜなら、マリは夫婦の貞節を守る義務

---

赤や金で豪華に装飾された外陣にうつとりとし、助任司祭がする説教の音楽的な響きに陶酔し、「内なる官能に満ちた夢想」にふけるために教会に日参している。このように、教会や教会で行われるミサや告解に、ゾラは女性の五感を目覚めさせる官能性を見出しており、作品内で何度も取り上げている。たとえばルゴン＝マッカール叢書第4巻『プラッサンの征服』や同5巻『ムーレ帥のあやまち』では、教会の持つ官能性や支配力が作品内で重要な位置を占めている。

<sup>31</sup> *Pot-Bouille*, Pl., t. III, p. 66.

<sup>32</sup> « Femmes honnêtes », *OC nouveau*, t. 11, p. 777.

も、その義務を侵すことで覚える罪悪感も、さらにはその罪悪感から生じるはずの快樂も感じることはないからである。マリは、同じ建物に引っ越してきた小説の主人公オクターヴ・ムーレに言い寄られて不貞の関係を結ぶ。しかし、ここで描かれる不倫は、性欲に駆られた男と快樂を感じられない女の間に行われた、甘美な恋愛ドラマや情熱とは無縁の味気ない性行為でしかない。

この不倫の場面に至るまでに、ゾラは2つのエピソードを巧みに潜ませて、不倫と家庭での教育の関連についての考えをわれわれに提示している。まず、マリがオクターヴに身を任せる直前、抵抗しながら彼女はその場にいない母を呼ぶ。しかし、母を呼ぶという行為は、オクターヴの行動を止めることもなく、マリに不倫を思いとどまらせることもない。このことは、家庭での教育がこのような場面では何の役にも立たないことを証明している。また、この不倫場面が描かれた章の終わりで、オクターヴたちと同じ建物の住人、カンパルドンが、マリを評して次のような賛辞を送る。「家庭の教育ですよ、きみ。それしかありませんな<sup>33</sup>！」この言葉は、マリの不倫相手であるオクターヴの目の前で吐かれるだけに、一層の空しさを帯びて、マリにほどこされた「家庭の教育」の無益さを露呈してみせているのである。このように、ゾラはマリの両親の教育方針が、マリの不倫を食い止めることができなく、むしろその方針こそがあやまちを導いたのだとわれわれに告げている。

## 2.メイドの悪影響

家庭での教育には、他にも危険がある。「ブルジョワジーにおける不倫」の中で、ゾラは手短ながら示唆に富んだ指摘をしている。

使用人たちによって墮落するケースを検討していない。しかし、これはかなり頻繁なケースで、ボルドーの裁判で恐ろしい実例が見られたばかりである。いたずらなブルジョワの少女たちは台所で墮落する。ちょうど下層階級の少女たちが通りで腐敗するのと同じように<sup>34</sup>。

『ごった煮』において、使用人たちの悪影響は、アンジェール・カンパルドンとカンパルドン家のメイド、リザとの関係にあらわされている。アンジェールは、家庭で育てられているのだが、それは彼女の母親ローズが、「寄宿

<sup>33</sup> *Pl.*, t. III, p. 79.

<sup>34</sup> « L'Adultere dans la bourgeoisie », *OC nouveau*, t. 11, p. 774.

学校では、少女たちは下劣なことをたくさん覚える<sup>35</sup>」と考えているからである。オクターヴとローズは、女の子の教育について次の点で意見が一致している。「若い娘を育てるのはとても責任が重いから、舗道の風からさえも遠ざけなくてはいけない<sup>36</sup>。」寄宿学校には入れず、外を歩かせることもないで、家の中に閉じ込めて娘を育てているところは、マリ・ピションの母親と同じである。しかし、母親が教育方針をオクターヴに披露しているこの場面にすでに、親の望んでいるのとはまったく違う方向に娘が育ちつつあることがほのめかされている。娘の教育について話し合うオクターヴと母の前にいながら、アンジェールはこっそりとリザをつねることに「陰険な<sup>37</sup>」喜びを味わっており、リザのほうもそれに反撃する。

そしてその間、リザが皿をかえるために彼女の椅子のそばに身をかがめるたびに、アンジェールはリザの尻をつねるのだったが、親密さに興奮していながら、どちらももったいぶった様子で、まばたき一つしなかった<sup>38</sup>。

ローズがリザを褒め上げる一方で、オクターヴはリザには隠された生活があると見当をつける。このカンパルドン家のディナーの場面から、アンジェールについて読み取れるのは、アンジェールがリザをつねるという肉体的接触に喜びを見出していること、そしてそうしたじやれ合いを両親には見つからないように何食わぬ顔をして行うだけの陰険さを持ち合わせているということだ。この2点は、小説が進むにつれて徐々にエスカレートしていく。使用人たちには娘を近づけないほうがいいと忠告するオクターヴの言葉に耳を貸すどころか、カンパルドン夫妻は自ら進んでリザの手にアンジェールを委ねるからである<sup>39</sup>。

また、アンジェール・カンパルドンは、家庭での教育がはらむ危険をもう一つ体現している。家庭に勤める使用人たちの悪影響もさることながら、家庭そのものが悪影響を娘に及ぼすこともある。特に家庭が崩壊するとき、それは決定的となる。カンパルドン家の場合、崩壊は、カンパルドンの愛人ガスパリースが家庭に入り込むという形で起こる。ローズのいとこでもあるガスパリースは、ローズのたっての願いにより家に住みつくことになり、不思

<sup>35</sup> *PL*, t. III, p. 18.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 19.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 18.

<sup>38</sup> *Ibid.*

<sup>39</sup> カンパルドンはオクターヴの忠告に「そのほうが娘の教育になりますよ」と答え、ローズは「リザなら安心だ」と思っているのである (*Ibid.*, p. 108)。

議と平和な三角関係が築かれる。ガスパリーヌは、アンジェールを監視するはずのローズにかわって家を取り仕切るようになり、ますます陰険になったアンジェールは、リザとの親密な付き合いを続ける。リザは、アンジェールにガスパリーヌとカンパルドンの関係を、性的なほのめかしを交えながら次のように教える。

「でもあなたのお父さまはあのひと（ガスパリーヌ）にたんまり詰め込んでやつてるので、お砂糖をね！」とリザはみだらな笑いを浮かべて言った。  
「そうよ！ そうよ！」とアンジェールも同じように笑いながらつぶやいた。  
「あのひとと何してるの、お父さまは？ ちょっとやって見せてくださいな。」  
そう言われると少女は、メイドの首に飛びついでむき出しの両腕で抱きしめ、彼女の口に激しくキスしながら、次のような言葉を繰り返すのだった。  
「ほら！ こんな風よ。ほら！ こんな風よ<sup>40</sup>。」

ところで、こうしたアンジェールの陰険さとリザとの同性愛的な交流は、ゾラによる寄宿学校生活の描写を思い起こさせる。ゾラによれば、寄宿学校の教育は、少女たちにサビース伯爵夫人のような偽善的な陰険さを身につけさせるだけでなく、同性愛的な触れ合いをも経験させるという。『寄宿女学校で』という短編の中で、ゾラは寄宿学校で育つ少女を次のように描く。

少女は年上の少女と一緒に物陰に紛れるのだろう。彼女は年上の少女を小さなお母さまと呼び、腰を抱かれながら、唇にキスされるままとなる。2人だけで少女たちは、ライラックの後ろに姿を隠すだろう。春の小道の生暖かさに恍惚となつた恋人同士となって<sup>41</sup>。

ローズは、寄宿学校で娘が堕落することを恐れていた。しかし、家庭が崩壊してしまうと、娘は寄宿学校で育った娘と同じような特徴を備えた、母親が一番望まないタイプの女性になってしまうのである。

### 3. 専制君主的な母

「ブルジョワジーにおける不倫」でゾラが不倫の原因として挙げているものがもう一つある。母親の大きすぎる影響である。このタイプの母親は、専制的で、娘に自分の主義を押し付ける。

金持ちに見せるための吝嗇ぶりを見ながら育つ少女は押金主義を身につける。

<sup>40</sup> Ibid., pp. 277-278.

<sup>41</sup> « Au couvent », OC nouveau, t. 3, p. 427.

少女は次のように教わる。金持ちだけが尊敬される、貧乏に見えるくらいなら嘘をつくほうがまし、最高の幸せは立派な身なりをすることなのだから、シルクのドレスの下に隠せるのなら、汚れたペチコートを着たっていいのだ、と<sup>42</sup>。

この哲学は、『ごった煮』のジョスラン夫人が娘ベルトとオルタンスに吹き込むのと同じ哲学である。母親は、自分の虚栄心を満足させてくれるような相手に娘を嫁がせるべく、娘に徹底的に自分の主義をたたきこみ、スバルタ式の教育をほどこす。そのためなら手段は選ばず、色仕掛けも辞さない姿勢で、ゾラの言葉を借りれば「お上品な壳春の講義<sup>43</sup>」を施してやるのである。しかし、こうしたトレーニングの様子が、小説でのジョスラン夫人のそれといかに酷似しているように見えようと、記事と小説の間には、確かに違いが見られる。記事では、両親がそろって目立ちたいという欲望に身を焦がして<sup>44</sup>娘の結婚のために奔走するのに対し、小説では、父親ジョスラン氏は、娘たちの教育には積極的に関わる様子はさほどなく、ただ夫探しの資金繰りのために夜を徹して内職するという自己犠牲的な精神を見せるに過ぎない。つまり、記事においてより、小説ではジョスラン夫人、つまり母親の存在が大きくなっているようだ。その証拠に、ゾラは繰り返しジョスラン夫人の豊満な胸元を強調してみせるが、これはジョスラン家での、特に夫に対しての夫人の威圧的で専制的な地位をあらわしている。

(ジョスラン氏の)妻が、大女らしい胸元を開くとき、彼をぐったりさせるのだった。その胸は、彼の首筋に崩れ落ちてくるような気がした<sup>45</sup>。

つまり、家で娘を育てようとする場合、娘の教育に父親が参加しないと母親の行き過ぎを食い止めるものがなく、母親は娘に対して母親というよりはむしろ厳格な教師になってしまう。しかも、この教師は、特訓のためなら平手打ちでしつけ、「夫を釣り上げる<sup>46</sup>」まで、母親としての愛情を見せることもない。ようやくベルトが同じ建物に住むオーギュスト・ヴァーブルを色仕掛けで釣り上げると、ジョスラン夫人は「母性愛の発作<sup>47</sup>」に駆られて次のように娘に対するいたわりを急に見せ始めるのだ。

<sup>42</sup> « L'Adulterie dans la bourgeoisie », *OC nouveau*, t. 11, p. 775.

<sup>43</sup> *Ibid.*

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 774.

<sup>45</sup> *PL*, t. III, p. 24.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 36.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 97.

ベルトは、病気じやない、と誓わなければならなかつた。なぜなら、母親は顔色が悪いと言って、細々と世話を焼いてみせ、煎じ薬を作ると言い張つたからだ。娘が床に着くと、裸足で戻ってきて、そつと娘を夜具でくるんでやるのだった。まるで昔、娘が子どもだった頃のように<sup>48</sup>。

まるで、ベルトが大きくなつて以来、初めて母親として世話を焼くかのように、ジョスラン夫人は娘のことを心配する。なぜなら、母親の特訓に対して娘は初めて満足の行く結果を出してみせたからである。この行き過ぎた熱意、母親による押金主義の刷り込み、そして父親の無力によって、娘ベルトは金目当ての結婚を成就させるために夫候補を誘惑し、結婚後金に困れば不倫をして愛人から巻き上げるようになり、まさにゾラの言った通り、「お上品な売春」に手を染めることになるのである。

このように、家庭での教育は、アンジェール・カンパルドンの例のように、寄宿学校の教育と同じような結果を導くか、あるいは、もっと悪い結果へと到ることもある。それはたとえば、愚かさによって不倫を犯してしまうようなまったくの無知であったり、母親の押金主義があまりに深く刷り込まれたための売春行為であったりする。原因是、家庭の崩壊や、両親の誤った教育方針、母親の大きすぎる影響などである。寄宿学校出身の女性たちにゾラがある程度似通つた、つまり官能的で偽善的で神経質な気質を持つ女性というイメージを与えていたのに対し、家庭で教育された娘はより多様性に富んでいる。それは、家庭という教育の場が不確定な要素に左右されるもろいものであることを示している。しかし不確定さは、欠点とも長所ともなりうる。つまり、家庭という場は、娘への悪影響が行き過ぎた場合歯止めがききにくいといった危険をはらんでもいるが、同時に理想的な娘の教育を、思い切った方法で実現できるという意味で、多くの可能性を秘めているのである。

## 理想的な教育

### 1. ポーリーヌの場合

寄宿学校での教育と家庭での教育の弊害をここまで述べてきたが、それでは、ゾラにとって女の子の理想的な教育とはどのようなものなのだろうか、という問い合わせが当然浮かんでくる。この問い合わせについて考えるとき、思い起こしてみたいのが、『生きるよろこび』の一節であろう。寄宿学校育ちのルイー

<sup>48</sup> Ibid.

ズが、顔を赤らめたポンヌヴィルの漁民たちの乱れた生活に対して、ポーリーヌは「自由に育てられたので」事実をありのままに冷静に受け止めた、とあった。実はポーリーヌにほどこされた教育は、これまでに見てきたどの教育法とも異なっている。彼女は、10歳でシャント一家に引き取られてからというもの、学校には通わず、寄宿学校に入れられることもなく、叔母のシャント夫人によって、自宅で教育を受ける。いわゆる自宅学習というわけだが、上で見たような例と違って母親ではなく、叔母の教えを受けている。シャント夫人は、家庭で娘を育てようとする母親によくあるように、「寄宿学校で少女たちは下劣なことを耳にする<sup>49</sup>」と考えており、自らポーリーヌの教師となって文法や算数など実際的な学問を教えるが、性や肉体に関することは一切教えない。なぜなら、シャント夫人の教育方針が、「おのずからどうしても必要になるまで、完全に無知にしておいたり、わざらわしい事柄は避ける<sup>50</sup>」というものだからだ。このため、初潮を迎えたポーリーヌは驚きと恐怖にとらわれることになる。しかし、自らの体の変化に直面した彼女は、従兄のラザールが持っていた医学書を読み、人体や生殖の仕組みを学ぶのだった。それも、「恥ずかしがることもなく、真剣に、〔…〕健康への愛によって、性的な妄想から引き離され救われながら<sup>51</sup>」読書を進める。そして、シャント夫人に対して次のような憤慨を抱く。

彼女は叔母が黙っていたこと、自分に何も知らせずにいたことに驚きと恨みを持っていた。どうしてあんな風におびえさせておいたのだろう？ それは間違っている。知ったからといって何も悪いことはないのに<sup>52</sup>。

つまり、ポーリーヌは、ルイーズとは違い、生殖に関することでも、想像を膨らませたり、恥じらいから中途半端に目をそむけたりせず、事実として冷静に受け止めることが大事だと考えているわけである。ここには、寄宿学校での教育、あるいは家庭での教育の欠点を克服した少女の姿がある。ゾラは、記事や小説の中で、女の子の教育のお粗末さを非難しているが、それは、シャント夫人のように、嫁入り前の娘には性に関する事を教えようとしない人々に対する非難でもある。性に関して無知だから、必要以上に恐れたり、また危険を知らずに飛び込んでしまったりする。だから未婚の少女たちこそ

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 847.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. 853.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 854.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 855.

人体の仕組みを知る必要があると、ポーリースを通してゾラは示していると言えよう。また、人体の仕組みを知ることができれば、もし病んだ部分があれば、それを治療することも可能になる。独学によるこうした学習を経て、「彼女の哀れみで胸が痛み、すべてを治療するためにすべてを知るという昔の夢を取り戻した<sup>53</sup>」ために、彼女の人類愛はますます強まり、近隣の住人たちのための慈善活動に熱心に取り組むようになる。

ところで、独学で知識を身につけたポーリースの教養は、体系を欠いた学習ゆえの不完全さを免れることができない。パリから帰ってきたラザールは、ポーリースが自分の医学書を読んだことやその知識の偏り方に驚く。

しかし、彼女は彼をよく面白がらせた。というのも彼女の教育にはいくつもの穴があり、相反しあう知識が風変わりに混じり合っていたからだ。叔母の女助教員らしい考え方と寄宿学校式の恥じらいに単純化されてしまった世の慣わし、そして医学書の読書を通して知った正確な事実や生命を解明する男と女の生理学的真実などである<sup>54</sup>。

ラザールは、こうしたポーリースの知識の欠点を埋めてやり、化学の手ほどきもする。彼のおかげでポーリースの教養は、よりバランスのとれたものとなり、彼女は化学者気取りのラザールの優秀な助手であり、信頼のおける友人となるのである。

## 2. 「先生」と弟子

ポーリースはこうして独学で得た知識をラザールによって補ってもらうわけだが、この2人の関係を発展させたものを、ルゴン＝マッカール叢書最終巻の『パスカル博士』に見ることができる。この小説には、クロチルドという若い女性が登場する。彼女も、ポーリースを思わせる健康的な女性なのだが、彼女の教育をしているのは、実の叔父にあたり、彼女と同居している医学博士のパスカル・ルゴンであり、クロチルドは尊敬をこめて彼のことを「先生」Maitreと呼んでいる。クロチルドの教育は、基本的に放任主義である。読み書きを教えた後は、読むものも彼女の意志に任せている。学校には通わせず、自宅で、それも独学での読書による学習という点で、クロチルドはポーリースと同じような教育で育っている。母親でなく、叔父によって教育の指導を受けているところもポーリースと似ている。医学研究に励むパスカル

<sup>53</sup> Ibid., p. 855.

<sup>54</sup> Ibid., pp. 866-867.

の助手として彼を支えている彼女が得意とするのは、模写である。パスカルも認めるほど彼女の模写は細やかで正確なのだが、時折、その均整を破る発作のように、想像力が爆発することがある。

2時間近く前から、彼女はタチアオイの正確で無難な模写を押しやって、別の紙に、奇抜であでやかな夢想の花々からなる想像の花束を書き散らしていたのだった。彼女の中にはこのような突然の気まぐれ、つまりきわめて正確な描写のただ中で、突飛な空想へと逃げ込みたいという欲求が起きた<sup>55</sup>。

この理性を破る夢想の発作はだんだんひどくなり、クロチルドは現実を無視した想像の花々のデッサン画に熱中するようになる。妄想ではなく、現実の中に生きること、科学を信じて病気を治すことを諭すパスカルに対して、クロチルドは苛立ちを覚える。正確な事実の確認や医学研究だけでは、幸せになれないし、その上科学はすぐさま幸せをもたらしてくれるわけではないからである。

わたしは待てないわ。わたしは知りたい、すぐに幸せになりたい。一気に知つて、絶対に、決定的に幸せになりたいの！ ああ、だからわたしは苦しいよ。一足飛びに完璧な知識へと駆け上がり、ためらいや疑念から解放されて完全な至福の中で安らげないなんて<sup>56</sup>。

葛藤から生じるこの焦りは、しかしやがて解消される。そして、パスカルが神經衰弱になり自らの科学への信仰を失ったときには、今度はクロチルドがパスカルの研究を弁護し、パスカル自身にもふたたび科学への熱意を取り戻させるのである。師弟関係がここであいまいになり、それはやがて恋愛関係へと発展していく。パスカルとクロチルドが肉体的に結ばれた後、クロチルドは自分たちの姿をゴリアテを倒した古代のダビデ王と彼に献身的に仕えるアビシャグになぞらえた空想的なパステル画にして描き、それを見たパスカルは彼女を咎める。

「ああ、きみは僕らを美化しすぎているよ！ 相変わらず夢想から抜け出していないというわけだね。覚えてるだろう、謎の架空の花々を描いたことを僕が咎めた頃と同じだ。」

---

<sup>55</sup> *Le Docteur Pascal, Pl., t. V, p. 920.*

<sup>56</sup> *Ibid., pp. 989-990.*

[…]

「美化しすぎている？ 美しすぎるということはないわ！ 本当よ。こういう風にわたしには見えるの。これがわたしたちの姿よ。ほら、見て！ これが混じりけのない真実なのよ<sup>57</sup>。」

クロチルドは、パスカルに15世紀の聖書の木版画を見せながら、優しく説得する。医学研究で確認されるような、事実の収集と論理的思考によって導き出される「真実」とは違う真実、自分の目を通して見えるもう一つの真実を彼女は科学者パスカルに教えてみせる。彼女はこうして、パスカルの現実のヴィジョンを、完全に刷新するにはいたらないまでも、より許容範囲の広いものへと変えていく。師であり、恋人でもあるパスカルが死に、彼の子どもを産んだ後、クロチルドは自らの過去を次のように振り返る。

まず彼女は、自分が描いた正確な模写と空想の模写へと思いを馳せた。そして、自分の二重性は、正確に模写するために時には数時間も彼女を花の前にくぎづけにする真実への情熱と、現実の外へと彼女を投げ込み、常軌を逸した夢想、地上には存在しない花々の楽園へと彼女を運び去る彼方への欲求の中に存在するのだといまや心に思うのだった。わたしはずっと変わらなかつた。絶えずわたしを変えてゆく人生の新たな波にさらされても、本質は今も昔と同じまだと感じられる<sup>58</sup>。

クロチルドの本質は、現実と夢想への志向が両立していることにあり、現実の部分はパスカルを支え、夢想の部分はパスカルの現実のヴィジョンを時に変えることで彼に新たな人生観を示唆することさえある。クロチルドという聰明な女性は、パスカルによって教育され、矯正され、また逆にパスカルが落ち込む時には、自信を回復させる。生命への信仰によって育まれ、その信仰を支え続け、最終的には彼の子どもを産むという行為によってそれを継承していくという形でゾラの描く理想的な教育は結実するのである。

### 結び

本稿では、ゾラがブルジョワ階級の女子の教育についてどのように考えていたのか、そしてそれをどのようにルゴン＝マッカール叢書において表現し

<sup>57</sup> *Ibid.*, pp. 1078-1079.

<sup>58</sup> *Ibid.*, pp. 1208-1209.

ていたのかを辿ってみた。まず花嫁養成学校としては問題の多い寄宿学校という空間をゾラが糾弾する様子を見た。ゾラは、寄宿学校が、媚態と偽善しか教えないこと、そして現実に対応する術を学ばせないことに憤っている。そして、家庭教育においても、母親が愛人にその立場を奪われたり、あるいは母親の影響が強すぎたりすると、同様の問題が起こりかねない。寄宿学校教育も、家庭教育も、良い夫を見つけることが最大の目的であるが、こうした教育を受けた女性たちは、たとえ結婚しても、夫婦間で愛情関係や信頼関係を結ぶことができず、ゾラの言うように、家庭はまったく別の思考回路を持つ2人の他人が寄り集まるだけの場となってしまう。しかし、それを避ける方法としてゾラが提案する理想的な教育は、女子を無知蒙昧の中に閉じ込めておくことはせず、結婚前の娘であっても、生理学的な事実は教え、自由に読書させることである。そして、独学による知識の欠如は、「先生」たる愛情関係で結ばれた人間が指導する。そうすれば、いつか少女は「先生」を助け、時には導くほどの存在にまで成長し、2人は信頼と尊敬に支えられた真のパートナーとなることができるのである。